

平安和文における地の文の係り結び

——源氏物語若菜上巻を資料として——

西 田 隆 政

Kakarimusubi in Narrative Sentences of *Heianwabun*

——Using the Tale of Genji as a Point of Reference——

NISHIDA Takamasa

Abstract : It is pointed out that *kakarimusubi* is used as one of the features of *Heianwabun*. This paper examines the use of the tendency of *kakarimusubi* in narrative sentences by making *wakana-jo* of the *Tale of Genji* applicable to investigation. As a result of the use being concentrated on conclusion of an auxiliary verb *keri*, and *soushiji* related auxiliary verbs and particles, there were very few examples other than these, and it was found that compared with quotations, such as conversation sentences with various examples of usage, the employment of *kakarimusubi* in narrative sentences is limited. It is thought that *kakarimusubi* in narrative sentences of *Heianwabun* is used so that the functions of *keri* may be reinforced.

要旨：平安和文の特徴のひとつに係り結びが多用されることがあげられる。この論文では、源氏物語の若菜上巻を調査対象として、地の文での係り結びの使用傾向を検討した。その結果として、助動詞「けり」と草子地関連の助動詞と助詞との結びに使用が集中し、それら以外の例は非常にすくなく、多様な使用例のある会話文などの引用文と比較すると、地の文での係り結びの使用は限定されたものであることが見いだされた。和文の地の文での係り結びは、「けり」の機能を補強するように使用されているとかがえられる。

1 はじめに

平安朝の和文においては、テンス・アスペクト系の助動詞「つ」「ぬ」「たり」「り」が、地の文で係り結びの結びの部分にもちいられることが、会話文などの引用文と比較すると、非常に例がすくないということをも、西田（2000・2002）で指摘した。また、地の文中では、これらの助動詞が結びとなる係り結びには係助詞「ぞ」の例しかなく、引用文中での「なむ」「や」「か」などもふくめた多様な用法があるのとは、対照的なものとなっている。このような傾向は、助動詞のつかない文末の例や、他の助動詞の文末での例ではどのようなであろうか。

この点について、今回は源氏物語の若菜上巻を資料として、地の文の文末形式を調査する。若菜上巻は、源氏物語中でも分量のおおい巻であり、さまざまな文の種類があることと、多様な引用文の例があり、おなじ巻のなかで比較するうえで便宜がある点から、調査対象とした¹⁾。

2 若菜上巻での文の種類調査

若菜上巻では、地の文に533の文が句点等によりしめされている。これらは、まず「一般的な文」と「引用文で終止する文」とにわけることができる。前者は、「述体句」や「喚体句」²⁾、あるいは、「分化文」や「未分化文」³⁾などといわれる、述語の有無等の文法上

での文の基本的な形式や意味から規定される文であり、後者は、和歌や会話文などが引用の形式ではなく、そのまま終止するような、文章内の地の文で文として機能している例である。次の[1]のような例があげられる。

[1]／はかなくてうはの空にぞ消えぬべき風にただよふ春のあは雪／御手、げにいと若くをさなげなり。(63ページ)

この例では、「と」「など」で引用する形式でなく、和歌がそのまましめされて、つぎに「御手」以下、地の文がつづく。これらは、「一般的な文」としての形式をもつものではないが、和文の地の文中で例のみられるものである。

若菜上巻では、「一般的な文」が522文、「引用文で終止する文」が11文であり、そのうちわけは、和歌の例が9文、会話文が1文、消息文が1文である。

つぎに、「一般的な文」とした文では、「分化文」の例しかみられず、「未分化文」の例は存在しない。その「分化文」のなかで、文が述語の形式でおわる文が517文であるのに対して、述語の部分が省略された「言いさしの文」が5文ある。つぎの[2]のような例である。

[2] 一夜のほど朝の間も、恋しくおほつかなく、いとどしき御心ざしのまさるを、などかくおほゆらむと、ゆゆしきまでなむ。院の帝は、月のうちに御寺にうつりたまひぬ。(65ページ)

[2] では、「ゆゆしきまでなむ」のあとの述語が省略され、そのまま次の文が「院の帝」以下つづく。このような例は、係助詞「なむ」の例が4文、複合の係助詞「こそは」の例が1文である。「言いさしの文」は会話文などの引用文では多用されるものの、地の文での使用は草子地などの文に限定されるものである。

「分化文」のうち、「言いさしの文」以外の文は「述語文」である。今回の主要な検討対象となるのは、この「述語文」で言いさしにならない文、517文である。「述語文」は、さらにその述語部分の種類により、「動詞文」「形容詞文」「形容動詞文」「名詞文」にわけることができる。現代語研究では、いわゆる形容動詞を述語とする文も「形容詞文」とするが⁹⁾、ここでは述語の品詞の種類ということで別に数値を算定する。

それぞれの文数は、「動詞文」440文、「形容詞文」35文、「形容動詞文」18文、「名詞文」24文である。「動詞文」の数をもっともおおく全体の82.6%をしめる。

つづいて、これらの文の述語での助動詞や助詞の接続する傾向を調査する。以下、「動詞文」を表1、「形容詞文」を表2、「形容動詞文」を表3、「名詞文」を表4でしめす。また、表5では、これらの文での係り結びの使用例で、その助詞の種類をしめした。なお、地の文文末での係り結びの例は、すべて連体形との結びであり、「こそ」と已然形の結びの例はみられな

表1 動詞文

	数値	係結	%
接続ナシ	249	4	56.6
る	7	1	1.6
らる	6		1.4
めり・き	2	2	0.5
けり	34	20	7.8*
れ・けり	1	1	0.2
られ・たり・けり	1		0.2
に・けり	3		0.7
たり・けり	2	1	0.5
なり・けり	1		0.2
つ	4		0.9
ざり・つ	1		0.2
ぬ	21	1	4.8
たり	20		4.5
り	59	5	13.4
む	1	1	0.2
べし	3		0.7
らる・べし	1		0.2
なる・べし	2		0.5
ぬ(ず)・なる・べし	1		0.2
めり	1	1	0.2
ぬ・めり	1		0.2
たる・な・めり	1		0.2
まじか・めり	1	1	0.2
ず	8		1.8
らるる・かし	1	1	0.2
ぬ・かし	1		0.2
む・かし	1	1	0.2
らむ・かし	1		0.2
けむ・かし	1	1	0.2
ず・かし	2		0.5
ぬ(ず)・や	1	1	0.2
ぬる・よ	1		0.2
計 32 種	440	43	100.0

* 「けり」には連体形終止が1例ある。係り結びの20例の中にはふくまない。

表2 形容詞文

	数値	係結	%
接続ナシ	24	1	68.6
けり	6	4	17.1
む	2	2	5.7
ず	1		2.9
や	2		5.7
計 5 種	35	7	100.0

表3 形容動詞文

	数値	係結	%
接続ナシ	13		72.2
けり	2		11.1
ず	1		5.6
むやは	1		5.6
や	1		5.6
計5種	18	0	100.0

表4 名詞文

	数値	係結	%
接続ナシ	16		66.7
けり	3	1	12.5
べし	1		4.2
ず	1		4.2
けむ・かし	1		4.2
かし	1		4.2
や	1		4.2
計7種	24	1	100.0

表5 係り結びの種類

	ぞ	なむ	*	計
接続ナシ	5			5
る	1			1
めり・き	2			2
けり	14	12		26
れ・けり	1			1
たり・けり		1		1
ぬ	1			1
り	5			5
む			3	3
めり		1		1
まじか・めり	1			1
らるる・かし	1			1
む・かし	1			1
けむ・かし	1			1
ぬ(ず)・や	1			1
計15種	34	14	3	51

*「む」の*3例は「なにかは」「いかでか」「いかでかは」がそれぞれ1例である。

った⁶⁾。

「動詞文」は、517文中の440文で、もっとも使用例のおおい文である。そこでの係り結び使用例をみると、440文中の43文にあり、9.8%にあたる。ただ、そのなかで注意されるのは、係り結びの使用される文末の形式が特定の例に集中していることである。とくに、助動詞「けり」の下接する例が21例、複合形もふくめると23例で、そのなかの52.3%をしめる。その他の例では、「り」の5例が目につく程度である。

「形容詞文」は35文で、係り結びの使用例は7文である。全体の20%であるが、そこでも「けり」の例

が4例で57.1%と、「動詞文」とおなじく、「けり」の使用例がおおい。

「形容動詞文」は18文で、係り結びの使用例は存在しない。

「名詞文」は24文で、係り結びの使用例は「けり」の1文のみである。全体の4.2%である。

表1から表4をまとめて、係り結びの使用例を整理したのが、表5である。これをみると、全体で517文中の51文に係り結びの例があり、9.9%にあたる。そして、その使用例の過半数が助動詞「けり」との結びである。複合形「れ・けり」「たり・けり」もふくめると、51文中の28文で54.9%となる。

「けり」以外の例でも、「めり・き」や推量系の助動詞「む」「めり」、さらには終助詞「かし」「や」「よ」など、地の文中では、いわゆる草子地ともされる、語り手が直接的に評言をのべる部分に使用される助辞の例が目につく。使用例のおおい「動詞文」に集中するが、「めりき」が2例、「む」が3例（「形容詞文」2例ふくむ）、「めり」が1例、「たる・な・めり」が1例、「まじか・めり」が1例、「らるる・かし」が1例、「む・かし」が1例、「けむ・かし」が1例、「ぬ(ず)・や」が1例、計12例である。[3]と[4]に例をあげる。

[3] そのかみも、人よりこよなく心とどめて思うたまへりし御心ざしながら、はつかにやみにし御仲らひは、いかでかはあはれも少なからむ。(75ページ)

[4] まだいとあえかなる御ほどに、いとゆゆしくぞ誰も誰もおほすらむかし。(77ページ)

[3] は、光源氏は朧月夜に対してその昔より執心していたので、久しぶりの再会でどうして恋の思いのつらなことがあろうかと、語り手の評がのべられる。[4]も、まだ年少の明石女御の出産を誰もが心配におもわれるようだという、作者の評である。ともに、物語の事態進展のなかで、作者が何らかの解説をくわえるという役割の文で、物語での事柄そのものをのべる文ではない。

助動詞「けり」は、竹取物語以下の平安和文の物語作品のなかで、段落の区切りに密接にかかわるものとの指摘がある⁷⁾。推量系の助動詞や終助詞の接続する例も語り手の評価や感想をのべる例である。このことからすると、51文中の39文と、76.5%が特定の例に集中していることになる。

これらを除外すると、動詞に助辞の接続のない例が4例、自発の「る」が1例、「ぬ」が1例、「り」が5

例、形容詞に助辞の接続のない例が1例、合計12例のみが、物語の「語り」との直接的な関連のすくないとおもわれる例である。

また、係助詞の種類も、基本的には「ぞ」が中心で、「けり」「めり」に「なむ」が見られるのみである。「なむ」の使用については、かなり限定されるものであるとかがえられる。

以上のことからすると、基本的な傾向としては、係り結びの使用比率は1割弱とかならずしもひくいものではないものの、使用される文末は特定のものにかざられている。これらは、かつて宮坂(1952)で指摘された結果に通じるものである。宮坂は、地の文では、会話文に比較すると、係り結びの種類が限定され、「なむ」の使用比率はひくくなることを指摘している。

ただ、その使用傾向の偏りや限定についてはさらに検討の余地があるようである。「けり」での使用例が半数以上をしめ、いわゆる草子地とされる例もふくめると、8割ちかい例となる。そのなかでも、助辞の接続しない例での使用例が圧倒的にすくなく、「動詞文」に4例、「形容詞文」に1例にすぎない。これらの点については、3章で個別例により検討する。

3 地の文での係り結びの使用

まず、「動詞文」と「形容詞文」の助辞の接続しない例から検討する。

[5] 父大臣は、琴の緒もいと緩に張りて、いたう下して調べ、響き多く合はせてぞ掻き鳴らしたまふ。(51ページ)

[6] 尚侍の君は、故後の宮のおはしましし二条の宮にぞ住みたまふ。(67ページ)

[7] 春宮の宣旨なる典侍ぞつかうまつる。(78ページ)

[8] 大将、いとかたはらいたけれど、はひ寄らむもなかなかいと軽々しければ、ただ心を得させてうちしはぶきたまへるにぞ、やをらひき入りたまふ。(128ページ)

[5] から [8] の動詞文の例では、いずれもその文でのもっとも「卓立」すべき対象を係助詞「ぞ」で提示している。[5] は管弦の名手である玉鬘の父の大臣が光源氏の四十の賀で「響き多く合はせて」琴を演奏し、[6] は朧月夜の尚侍の君は「故弘徽殿の女御の二条宮」に住み、[7] は「典侍」が出産の湯殿の奉仕をし、[8] は六条院の蹴鞠での猫の騒動で姿があらわに

なった女三宮に夕霧大将が「うちしはぶき」することで注意を喚起する。

これらの例では、係助詞で指定される部分が文において非常に重要な位置をしめる事柄ということがいえる。[5] では音楽の血筋にすぐれた大臣家につたわる琴の奏法が特別なものであること、[6] では朧月夜が光源氏との因縁のある故弘徽殿女御の屋敷に居住してそこでの再会に昔をしのぶものがあること、[7] では春宮の最初の若君誕生ということで春宮つきの典侍が奉仕すること、[8] では注意の困難な状況で夕霧が手をつくして姿があらわになっていることを女三宮にしらせたことなど、これらの語句が物語の進展上重要なことがらしめずものとなっていることが理解される。

[9] ただかの絶え籠りにたる山住みを思ひやるのみぞ、あはれにおぼつかなき。(120ページ)

[9] の形容詞文の例は、明石の君が「父明石入道が連絡をたつて山中にこもったのをおもいやることだけ」が不安でしかたがない、とするものである。自分の運命をきりひらいていくれた父をおもいやる気持ちのつよいことが、ここでの重要な語句とかがえられる。

それに対して、係り結びの使用されない文では、これらのような特別に「卓立」する必要がないということにもなる。

[10] さるものの上手の、心をとどめて弾き鳴らしたまへる音の、いと並びなきを、異人は掻きたてにくくしたまへば、衛門の督のかたくいなぶるを責めたまへば、げにいとおもしろく、をさをさ劣るまじく弾く。(51ページ)

[11] 琴は、兵部卿の宮弾きたまふ。(51ページ)

[10] [11] は、[5] の前後の例で、おなじく六条院での演奏の場面である。[10] では、柏木衛門の督が無理に琴をしいられたが父にもおとらないまでに演奏したというのであるが、その直後には名人の子でも「かくしもえ継がぬわざぞかし」と人々のきびしい批評があり、格別の評価はえていない。[11] では、「琴(きん)」を兵部卿の宮が演奏したとあるのみである。

このように、[6] と類似した演奏に関する文でも、それが「卓立」される文とは、あきらかにちがったところがあり、一般的な事柄のみをのべる文では係り結びはとくに必要とはされていない。係り結びを地の文で使用する場合は、とくに物語の叙述の進展上、必要なものにかざられているようである。

以上の点からすると、地の文での助辞のつかない動

詞の文末などでは、通常は係り結びをもちいずに文を叙述し、そのような特別に「卓立」すべき部分のみが係り結びでしめられるということにもなる。この点については、以前助動詞「つ」「ぬ」「たり」「り」の検討でもふれたところである⁹⁾。

[12] 思ひ定むべき世のありさまにもあらざりければ、今よりのちもうしろめたくぞおぼしなりぬる。(1060 ページ)

[12] には、「ぬ」の例をあげた。この例では、紫上が女三宮降嫁後夫婦の仲もこれから先どうなるか不安に思うことがのべられる。「うしろめたくぞ」と紫上が心配や不安の気持ちをつのらせていることが「卓立」されている。

しかし、若菜上巻の他の「ぬ」20例では、係り結びは使用されず、源氏物語全体でも地の文522例中で係り結びとの結びは11例にすぎない¹⁰⁾。源氏物語の地の文では、「けり」や特定の助辞との結び以外で係り結びの使用されることは例外的であり、全体では「述語文」517例中の51例と10%弱の文が係り結びの結びとなるが、それは全体としての平均したものであり、それ以外では、動詞の助辞の接続しない文では249例中の4例で1.6%となるように、係り結びが多用されているわけではない。結局のところ、「けり」の(複合例もふくむ)53文中の26文で52.8%に係り結びがもちいられており、それが全体の比率をおしあげているのである。

そこで、つぎの4章では、使用例が限定される地の文に対して、会話文などの引用文ではどうなのかを検討することにした。

4 引用文での係り結びの使用

会話文の例からみていく。会話文では、地の文で例外的であった動詞や形容詞に助辞の接続しない例での使用例が目につく¹¹⁾。

[13] この秋の行幸ののち、いにしへのこととり添へて、ゆかしくおぼつかなくなむおぼえたまふ。(16 ページ)

[14] 今かくまつりごとをさりて、静かにおはしますころほひ、心のうちをも隔てなく、参りうけたまはらまほしきを、さすがに何となく所狭き身のよそほひにて、おのづから月日を過ぐすこと、となむ、をりをり嘆き申したまふ。(18 ページ)

[15] なほ、さる人はいとたのもしげなくなむある。(28 ページ)

[16] 高き心ざし深くて、……なほまたこのためにと思ひ果てむには、限りぞあるや。(29 ページ)

[17] 人伝ならで、物越に聞こえ知らすべきことなむある。(68 ページ)

[18] 物越にはるかなりつる対面なむ、残りあるこちする。(75 ページ)

[19] かかる御消息なむある。(106 ページ)

[20] さきざきの人の上に見聞きしにも女は心よりほかに、あはあはしく、人におとしめらるる宿世あるなむ、いとくちをしく悲しき。(14 ページ)

[21] 女御子たちを、あまたうち捨てはべるなむ心苦しき。(39 ページ)

[22] すべて世の人の……心ひとつにしづめてありさまに従ふなむよき。(45 ページ)

[23] それもまた……よろづのことなのために目やすくなれば、いとなむ思ひなくうれしき。(119 ページ)

[13] から [19] が動詞、[20] から [23] が形容詞の例である。会話文では、動詞や形容詞の例でも係り結びの結びとして使用されることは、とりわけ少数ということでないようである。会話の相手にはたらきかける例として「なむ」が使用されるとかながえられる¹²⁾。

それ以外でも、地の文ではみられなかった、助動詞「つ」「たり」「ず」の例もみることができる。

[24] もとより御身に添ひきこえさせむにつけても、……いとかうしものしたまはじとなむ、年ごろは、なほ世の常に思うたまへわたりはべりつる。(111 ページ)

[25] 今はまたその世にもねびまさりて、光るとはこれを言ふべきにやと見ゆるにほひなむ、いとど加わりにたる。(19 ページ)

[26] 故院の上の、今はのきざみにあまたの遺言ありしなかに……年ごろことに触れて、その恨み残したまへるけしきをなむ漏らしたまはぬ。(16 ページ)

[24] の「つ」、[25] の「に・たり」、[26] の「ず」は、それぞれ地の文では複合形もふくめて、5例、20例、8例あるにもかかわらず、使用例がみられない。これらの例からしても、会話文では、地の文のように、「けり」などに係り結びの例が集中するようなことはないとかながえられる。

つぎに、消息文の例をみても。若菜上巻には、明

石入道から娘の明石の君と妻の明石尼君への手紙の例がある。この手紙には23の文があるが、その中に「なむ」の結びが8例、「か」の結びが1例、「かは」の結びが1例みられる。遺言としてのこした手紙ではじめて夢の真相をしらせただけに、「なむ」を多用した読み手にうったえかけるようなものとなっている。とくに、地の文では使用例のすくない、助動詞「ぬ」にも例のあるのが注意される。

[27] このひとつの思ひ……水草清き山の末にて勤めはべらむとてなむまかり入りぬる。(103ページ)

[28] この月の十四日になむ、草の庵まかり離れて、深き山にいりはべりぬる。(104ページ)

以前調査したところでは、源氏物語全編の地の文でも「入る」のような移動動詞での係り結びの例は2例のみであった¹³⁾。これらの例は、山奥に命をすてる覚悟で修行にいく決意のかたいことをつたえるためにも「なむ」が使用されているとかがえられ、[27]では「勤行への覚悟」、[28]では「山奥にはいる日」が、それぞれ「なむ」で「卓立」されているのである。

また、この手紙の直後にある、明石尼君の質問への使いの僧の返答となる会話文は、7文中の6文が「なむ」の係り結びの例である。説明的な意識のつよい会話文などでは、それだけ「なむ」の使用例がおおくなるとかがえられる。

以上のように、引用文での係り結びの例を検討してきたが、やはり地の文とはちがった使用傾向にあることはあきらかである。会話文で「なむ」の使用例のおおいことはすでに指摘のあるところであるが¹⁴⁾、地の文との比較という点からすると、どのような文末の例でも係り結びが使用されるという点に注意される。逆にいえば、地の文では、係り結びは自在に使用されるようなものでもなかったともいえるのである。

5 地の文での係り結びの機能

以上、源氏物語若菜上巻の地の文での係り結びの使用について検討してきた。その結果として、とりわけ注意されるのは、つぎの4点である。

- 1 地の文文末での係り結びの使用率は10%弱でひくいものではない。
- 2 その使用例の半数は助動詞「けり」がしめる。
- 3 係助詞「なむ」の使用は「けり」に集中し、その他は係助詞「ぞ」が使用される。

- 4 会話文に多様な文末の係り結びがあるのと比較すると、地の文の使用傾向は「けり」と草子地関連の文末に集中するという特徴がある。

助動詞「けり」と係り結びの関係については、阪倉(1993)にとかれているのが参考となる。

「けり」には、過去の事柄に今あらためて気付いたという気持が籠められたり、また、その事柄を現在の立場から説明的に叙べるという態度が示されたりするのである。「——なむ——ける」という形の解説的表現が物語文に特徴的に現れる理由が、そこにあったと思われる。(227ページ)

説話に限らず物語においても、その発端の部分では、登場人物の紹介や事の起こりを述べて、自然に叙述は説明的になるし、また、結末の部分は、以上の話から導かれる語り手の結論を読者に理解させようとして、解説的になるのが一般である。そういうところに用いられるのが、先に述べた「なむ」を含む文、特に「——なむ——ける。」「——なむ——たる。」あるいは「——ぞ——ける。」などという呼応を持つ文であった。(231・232ページ)

上記の引用部分では、「けり」のもつ解説的・説明的な叙述をおこなうという機能が係り結び「なむ」「ぞ」との共起にむすびつきやすいことがのべられている。「けり」自体の機能が「なむ」「ぞ」のもつ機能と相補する点があり、それが両者の共起しやすさにつながるといえよう。

また、いわゆる草子地とされる部分は、物語の語り手が批評等をおこなうものであり、おのずと解説的な要素がつよく、この点が係り結びの使用されることにつながると思える。これらも「けり」に使用されるのと同様の理由が想定される。

とすると、地の文でのそれ以外の助辞のつかない文末などにおいては、「なむ」のもつ聞き手へはたらきかけ説明するような機能は、「けり」のような語り手の解説のような部分以外では、かならずしも必要としなかったということになる。また、「ぞ」のもつ、特定の語句を「卓立」したうえで解説するという機能も、とりわけ必要な特定の部分でしか使用されなかったということになる。

源氏物語などの和文の文章では、係り結びが多用されたということはそのとおりのことであるが、地の文については、保留すべき側面がある。とくに、もっとも使用率のたかい、動詞や形容詞などの助辞の下接しな

い文末で、逆にもっとも係り結びの使用率がひくいのは、注意されるべきである。

地の文では、解説的ではない、事柄をつみかさねて叙述するような部分では、係り結びは必要とされていない。「けり」などの特定の例に係り結びを集中的に使用することで、係り結びの文のもつ、相手にはらたきかける解説的な機能が、地の文中でより明示的にもちいられていたともかんがえられるのである。

6 おわりに

今回の調査により、源氏物語若菜上巻の地の文では、係り結びの使用率が10%程度あるにもかかわらず、その使用例は偏在していることがあきらかになった。地の文の係り結びは、助動詞「けり」との共起性がつよく、その解説的な機能を補強する意味があるとかんがえられる。この機能は、係り結びだけでなく、ひろい意味での連体形終止の文にも存在するものである¹⁵⁾。また、このことは、地の文では連体形終止の使用例自体が少数である¹⁶⁾こととも関連するとおもわれる。

今回は、源氏物語の若菜上巻という限定した範囲での検討におわったが、源氏物語全編での傾向もふくめて、より詳細な調査をおこなうことを、つぎの課題にしたいとおもう。

注

- 1) 調査には、石田・清水校訂の『新潮日本古典集成』をもちいた。引用する際の下線は私に付した。
- 2) 山田(1907・1922)による。
- 3) 益岡・田窪(1992)による。
- 4) 国立国語研究所(1963)による。このばあい、「述語文」と「独立語文」となる。
- 5) 川端(1976)では「名詞文」もふくめての「形容詞文」を定義する。ここでは述語の品詞の種類による区分で検討する。
- 6) 地の文中にも「はさみこみ」「挿入句」として「こそ」の結びの例がある。また、「係り結びの流れ」とされる例もある。今回これらについての検討は保留する。
- 7) 阪倉(1956)、塚原(1976・1982・1987)などには、その具体的な事例の分析がおこなわれている。
- 8) 係助詞の「卓立」については、近藤(2000)に詳細な記述がある。
- 9) 西田(2000・2003)による。
- 10) 西田(2000)による。
- 11) 会話文には、「こそ」や疑問の「や」「か」など多様な係り結びの例がみられるが、今回の検討では「ぞ」「なむ」と連体形の係り結びに限定し、上記の例についてはふれない。

12) 宮坂(1952)では「くなむ」は語る強調、「ぞ」は写す強調である」とされる。阪倉(1993)では「なむ」が会話文によく用いられて、相手に説明するという態度を強く示すものであったのに対して、「ぞ」はむしろ話し手自らにおいて(極端に言えば一方的に)筋を通して述べるという態度を示すものであった(したがって会話文に現れることは少なく、むしろ書きことば的であった)ためであろう」とされる。

- 13) 西田(2000)による。
- 14) 宮坂(1952)による。
- 15) 阪倉(1993)による。
- 16) 山内(2003)による。

参考文献

- 石田穰二・清水好子 1980『新潮日本古典集成源氏物語5』(新潮社)
- 尾上圭介 1982「文の基本構成・史的展開」(『講座日本語学2』明治書院)
- 川端善明 1976「用言」(『岩波講座日本語6 文法I』岩波書店)
- 小池清治 1967「連体形終止法の表現効果—源氏物語・今昔物語集を中心に—」(『言語と文芸』54)
- 国立国語研究所 1963『話しことばの文型(2)』(『国立国語研究所報告』23, 秀英出版)
- 近藤泰弘 2000『日本語記述文法の論理』(ひつじ書房)
- 阪倉篤義 1956「竹取物語の文章と構成」(『国語国文』25-11, 阪倉1975に所収)
- 1975『文章と表現』(角川書店)
- 1993『日本語表現の流れ』(岩波書店)
- 鈴木 泰 1999『改訂版古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』(ひつじ書房)
- 塚原鉄雄 1976「竹取物語の文章構成」(『中古文学』17, 塚原1987に所収)
- 1982「源語各帖の冒頭表現—源氏物語の作品構成—」(『源氏物語の探求第7輯』(風間書房)
- 1987『王朝初期の散文構成』(笠間書院)
- 益岡隆志・田窪行則 1992『基礎日本語文法—改定版—』(くろしお出版)
- 宮坂和江 1952「係結の表現価値—物語文章論より見たる—」(『国語と国文学』29-2)
- 山内洋一郎 2003『活用と活用形の通時的研究』(清文堂)
- 山口佳紀 1987「各活用形の機能」(『国文法講座2』明治書院)
- 山田孝雄 1907『日本文法論』(宝文館)
- 1922『日本文法概論』(宝文館)
- 西田隆政 2000「助動詞「つ」「ぬ」と係り結び—源氏物語を中心に—」(『表現研究』71)
- 2002「源氏物語における「たり」「り」の文末用法—係り結びの使用頻度と文体差との関連をめぐって—」(『甲南女子大学研究紀要』38 文学・文化編)